

## 第9回ルーラルナーシング学会（口演）

### 分娩が出来ない島での助産師の役割と課題

島根県<sup>おき</sup>隠岐広域連合立<sup>おき どうぜんびょういん</sup>隠岐島前病院

発表者 家中ふみ代

共同研究者 野田淳子 松浦幸子

白石裕子 白石吉彦

#### 【目的】

日本海に浮かぶ<sup>おき</sup>隠岐諸島は島根半島から約40～70Km離れ、<sup>どうぜん どうご</sup>島前と島後に分かれている。島前は西ノ島、中ノ島、知夫里島の3つの島からなり、人口6084人、高齢化率42.1%である。<sup>おき どうぜん</sup>隠岐島前病院は西ノ島町に位置し病床数44床を有する島前の中核医療機関としてその役割を担っているが、分娩は取り扱っていない。島では産婆さんにより分娩が行われていた歴史がある。最後の助産師さんが、平成4年頃、高齢の為、引退された事で島の妊婦は、隣の島である島後もしくは本土での出産を余儀なくされることとなった。

平成5年に保健所による健診から当院の月2回の非常勤医師による産婦人科診療に引き継がれた。<sup>おき どうぜん</sup>隠岐島前病院の助産師は正規職員1名、臨時職員1名の2名である。島の助産師は、主に産婦人科医師不在の中、島で出産出来ない妊婦の妊娠期を安心して過ごせるよう日々の対応を求められる。助産師としての役割の大きさは計り知れない面がある中、毎年30名前後の妊婦を支援し、島外での出産へと導いてきた。島で暮らす妊婦の思いや、助産師以外の医師・看護師の思いを調査し、島の助産師に求められる新たな役割や課題を明らかにし、今後に生かす。

#### 【方法】

平成25年4月～平成26年3月までに出産した妊婦と当院医師・看護師を対象に無記名で選択、記述式のアンケート調査を行った。分析方法は選択項目を単純統計し、自由記載については類似内容をまとめ分析した。調査対象者には文書で研究的に分析、公表する旨を説明し、自由意思による提出を求めた。個人が特定されることがないよう倫理的配慮に努めた。なお、この調査は病院長の承諾を得て行った。

#### 【結果】

妊娠期において80%の妊婦が何らかの不安を感じていた。いつでも助産師に相談できる環境が不安軽減させていた。37週から出産までの一ヶ月間の本土での出産待機中に不安があることが解った。また、産後一カ月健診までに、助産師による新生児訪問を73%が希望していた。医師・看護師においては、妊婦の救急受診に対して78%が不安を感じていた。救急の問い合わせを受けた事のある看護師は、すぐに助産師に連絡相談していた。緊急出産時の新生児、未熟児、妊婦への対応には78%の医師・看護師が「どれも自信がない」と答え、産婦人科救急の定期勉強会は全員が希望していた。医師側からは、妊婦の異常の早期発見のために助産師の超音波検査技術のスキルアップや定期的な助産師外来の開設を求める意見があった。

#### 【結論】

島で暮らす妊婦の思いや、助産師以外の医師・看護師の意見を明らかにすることで、助産師の新たな役割としては、本土での出産待機中の妊婦の不安軽減のために本土側の地域助産師との連携を図ることや、産後に、助産師による新生児訪問の実施、院内においては、定期的な産婦人科救急等の勉強会の企画、また、島の助産師としての超音波検査技術のスキルアップや定期的な助産師外来の検討などが明確になった。今後も住民の思いを尊重し、今以上に保健、医療、福祉の連携をはかりながら、さらに安心してより安全に妊娠期を過ごせるよう工夫につなげたい。